

平成25年度「海と船の博物館ネットワーク活動」事業完了報告書

事業内容

全国38か所の博物館、資料館等が開催する海、船に関わる39の企画展を支援し、各地の文化財・調査研究資料等の展示を通して、海洋及び海事知識の普及啓発を図った。また、海と船の巡回展展示アイテム3セットを全国5か所の博物館等に貸し出し、海と船の巡回展を開催した。海と船の博物館ネットワークWEBページでは、海と船の企画展の募集情報を告知し、WEBページの保守・運営を行った。

1. 「海と船の企画展」への支援（申請38館39企画展、支援実施：38館39企画展）

①名 称：八戸市水産科学館マリエント『2013 水の生き物 おもしろ企画展（全10企画）』

主 催 者：八戸市水産科学館マリエント

開催時期：平成25年4月5日（金）～平成26年3月15日（金）

※3月16日から3月31日までは自主開催

場 所：八戸市水産科学館マリエント

内 容：普段は目にすることのできない水生生物や、水産分野で重要な役割を持つ生物等について、テーマを設け、資料だけでなく生態そのものを効果的に展示することにより、将来の水産や海洋分野を担う子供たちに、水産・海洋分野への興味・関心・夢を創出することを趣旨とした。なお本企画展は、全10企画からなる、水産・海洋分野への興味・関心を持って頂くことをテーマとした「通年開催の企画展」と位置付けて実施し、“水産陸上養殖の救世主”として注目を浴びている“好適環境水”を使用し、水産業の町“八戸”において、“最先端の水産科学”に触れることのできる展示となった。

②名 称：夢とロマンの帆船模型展

主 催 者：関門海峡ミュージアム（海峡ドラマシップ）

開催時期：平成25年11月3日（日）～平成25年12月1日（日）

場 所：第一会場：関門海峡ミュージアム

第二会場：旧大連航路上屋

内 容：大作から小型のものまで、日本や世界の帆船模型を150隻を展示。期間中には展示会場の目の前の岸壁に大型練習帆船が寄港し、本物の帆船と見比べることで帆船模型の精密さ・緻密さの理解に繋がった。また、帆船模型の作り方教室を開催し、模型作りの指導を行った。

③名 称：風土記1300年記念特別展「播磨国風土記―神・人・山・海―」

主 催 者：兵庫県立考古博物館

開催時期：平成25年4月20日（土）～平成25年6月23日（日）

場 所：兵庫県立考古博物館
内 容：『播磨国風土記』編纂から1300年を記念した特別展として、考古資料や文献資料を駆使し、播磨地域で育まれた歴史や文化、豊かな自然の恵みに触れ、先人の息吹を感じるとともに、1300年前の人々が今に伝えてくれた播磨地域の歴史、豊かな自然と産物、人々の暮らしを明らかにした。また、遺跡ウォークなどの関連事業、「考古博であそぼう」等のイベントを開催した。

④名 称：特別展「瀬戸神社 ～海の守護神～」
主 催 者：神奈川県立金沢文庫
開催時期：平成25年4月26日（金）～平成25年6月9日（日）
場 所：神奈川県立金沢文庫
内 容：鎌倉時代から武州金沢の海の守護神として祀られる瀬戸神社の神宝を通じて、中世の瀬戸神社 御祭神大山祇神像や重要文化財舞楽面、称名寺聖教により中世の信仰、また近世の瀬戸神社 神号額や奉納扁額、絵馬などと神道裁許状などにより江戸時代の様子を紹介した。

⑤名 称：平戸松浦家の名宝と禁教政策 ―投影された大航海時代とその果てに―
主 催 者：西南学院大学博物館
開催時期：平成25年6月8日（土）～平成25年8月3日（土）
場 所：西南学院大学博物館
内 容：九州のキリスト教シリーズの第4弾で、キリスト教とゆかりの深い平戸市を取り上げた。本企画展は南蛮船行き交う開かれた港市の華やかな平戸から、ここを治めた平戸藩主松浦家にスポットをあてたものである。ここで営まれていた生活の実像について、キリシタン信仰を含めて明らかにしていき、また、平戸を行き交った海外交流を示す資料をもとに、鎖国体制前後における、国内状況の変化について紹介した。

⑥名 称：南島原市ボトルシップ展
主 催 者：口之津歴史民俗資料館・海の資料館
開催時期：平成25年7月5日（金）～平成25年7月28日（日）
場 所：口之津歴史民俗資料館・海の資料館
内 容：口之津町船員会と元船員でつくる「ともづな会」の会員ら約50人が作った80点のボトルシップを展示。風を受けて膨らんだ帆の質感やロープの数など細部まで帆船を忠実に再現した作品などが並び、いろいろなボトルシップを目にすることで市民に海や船への興味を持ってもらった。

⑦名 称：「トレジャーアニマル探究記」～海と山に珍獣・希少生物を求めて～
主 催 者：萩博物館
開催時期：平成25年7月6日（土）～平成25年9月8日（日）
場 所：萩博物館

内 容：世間でしばしば話題になる「希少生物」や「珍種」といわれる生物をバラエティ豊かに展示し、子どもたちの科学的好奇心を刺激した。
希少生物といえども様々な実情を抱えた生物たちがいることを伝え、自然界や生物を客観的に見て判断する力を養った。また、郷土の自然に未知の珍しい生物が生息していること、人間活動によって否応なしに絶滅に瀕し「希少生物」となっていく生物がいることを伝え、人々に郷土の自然と共存したい、するべきという子どもたちの意識・意欲の向上を図った。

⑧名 称：海のどうぶつ博物館

主 催 者：株式会社海の中道海洋生態科学館（マリンワールド海の中道）

開催時期：平成25年7月12日（金）～平成25年9月1日（日）

場 所：マリンワールド海の中道

内 容：イルカ、アシカ、アザラシなどの海獣類は、進化の過程で生活の場を水中へと移した哺乳類であり、その体には水中生活に適応した特徴があることを、剥製や骨格標本により、近縁とされる陸上哺乳類との比較展示をすることにより紹介し、海獣類の体の特徴、水中環境についての理解を深めた。

⑨名 称：海山川のおくりもの 目からウロコの大生き物展
～生物多様性ホットスポット JAPAN～

主 催 者：沖縄県立博物館・美術館

開催時期：平成25年7月12日（金）～平成25年9月1日（日）

場 所：沖縄県立博物館・美術館

内 容：本展示会では、日本が地球上の生物多様性ホットスポットの一つであり、そのなかでも琉球列島の生物多様性が高いことを県民に伝えた。さらに、生物と人との関わりなども併せて紹介し、自然からの恩恵を再認識する機会を提供し、生物多様性を維持することの大切さを周知することによって、沖縄県にとって大きな資産である在来の自然がより良い形で残されることを目指した。
夏休み子どもたちが五感で感じられるハンズオン展示を豊富に加えた。

⑩名 称：海からあがった宝もの4 瀬戸内海・中世沈没船の謎

主 催 者：今治市（今治市村上水軍博物館）

開催時期：平成25年7月13日（土）～平成25年9月16日（月）

場 所：今治市村上水軍博物館

内 容：海からみた日本の歴史をテーマとする今治市村上水軍博物館では、これまで芸予諸島を中心に海からあがった考古資料の情報を収集してきた。その最新研究成果を来館者に伝えることで、水中考古学の価値や魅力を発信するとともに、貴重な文化財である海揚がり考古資料の散逸防止も目的とした。海事都市を標榜する今治にとってその礎とも言える海の歴史学習の一助として活用することを目的に、水中考古学の可能性、近隣の沈没船伝承を紹介した。

- ⑪名 称：ぎょ・魚・漁—淡水魚の知られざる生態を追って—
主 催 者：ミュージアムパーク茨城県自然博物館
開催時期：平成25年7月13日（土）～平成25年9月23日（月）
場 所：ミュージアムパーク茨城県自然博物館
内 容：日本の川や池、湖などには約300種の魚が棲息している。私たち日本人は、これらの淡水魚を漁業資源としてだけでなく、遊漁や鑑賞などさまざまな場面で利用し、恵みを享受してきた。本企画展では、人との関係の深いアユやウナギ、サケ、コイなどを中心に日本の淡水魚の多様な生態や人との関わりを紹介した。また、環境の急激な変化によって絶滅の危機にある淡水魚も紹介し、現状と今後について考えを深める場とした。
- ⑫名 称：進水式絵葉書にみる船の変遷
主 催 者：神戸大学大学院海事科学研究科海事博物館
開催時期：平成25年7月12日（金）～平成25年10月26日（土）
場 所：神戸大学大学院海事科学研究科海事博物館
内 容：造船所では、進水記念として絵葉書を作成していた。しかし、絵葉書は進水式関係者に少数配られるだけの貴重なものであった。本館所蔵の絵葉書を造船所ごとにまとめ、それら造船所ごとの絵葉書と併せて関連する船模型を展示し、日本における建造船の変遷をわかりやすく解説した。すでに解体され、実際の姿を目にすることができない船まで一堂に会し、船の勇姿をご覧頂いた。
- ⑬名 称：海人の世界—発掘された海辺のくらし—
主 催 者：和歌山市（和歌山市立博物館）
開催時期：平成25年7月20日（土）～平成25年9月1日（日）
場 所：和歌山市立博物館
内 容：瀬戸内海の東端に位置し、紀伊半島西岸を形成する和歌山県においては、古くから海と深く関わってきた歴史がある。今回、海浜部で発掘された遺跡やそこから出土した遺物を通して、古代人がどのように海と関わりをもって生活を営んでいたのかを探ってみることで、現在にも通じる共通点を展望した。
- ⑭名 称：ガアタロ～五島のカップ伝説～
主 催 者：五島観光歴史資料館
開催時期：平成25年7月20日（土）～平成25年9月1日（日）
場 所：五島観光歴史資料館
内 容：五島には、大円寺の火消しガッパ伝説に代表されるように、現在でも様々な河童（ガアタロ）伝説や物語がのこり、ネブタのモチーフになるなど市民に親しまれている。本企画展では、河童の姿やその特徴などが記された和書などを紹介し、これまで秘蔵とされてきた河童・人魚のミイラ、さらに市内に残るガアタロ伝説や民話に登場する河童を取り上げ、時代とともに語り伝えられてきた人間との関わりについて探った。

- ⑮名 称：平成25年度特別展示「時を超えた生き物たち」
主 催 者：笠岡市教育委員会（笠岡市立カブトガニ博物館）
開催時期：平成25年7月20日（土）～平成25年9月29日（日）
場 所：笠岡市立カブトガニ博物館
内 容：何千万年あるいは、何億年も前に繁栄し、現在もなお、原始的な形態を残しながら細々と生き続けている系統依存種（レリック）を俗に「生きている化石」といい、カブトガニは、その中でも代表的な存在である。「生きている化石」は、カブトガニ以外にも多くの生物が知られており、これらの現生物とその祖先にあたるものを対比しながら、彼らの細くて長い道のりをたどった。カブトガニに必要な環境生態の紹介、様々な時代のシーラカンス化石を展示した。
- ⑯名 称：薩英戦争150年 ―前の浜の戦―
主 催 者：尚古集成館
開催時期：平成25年7月20日（土）～平成25年10月17日（木）
場 所：尚古集成館別館
内 容：平成25年は薩英戦争がおこなわれてから150年目となり、この節目の年に海洋国家である薩摩藩が、海防を重視していたこと、そして薩英戦争で薩摩藩の取り組みが役立ち、海防の重要性が広く認識されるようになったことを伝えた。
- ⑰名 称：特別展「いきもの いっぱい 大阪湾 ～フナムシからクジラまで～」（大阪湾 Years 連携企画展事業）
主 催 者：公益財団法人大阪市博物館協会（大阪市立自然史博物館）
開催時期：平成25年7月20日（土）～平成25年10月14日（月）
場 所：大阪市立自然史博物館
内 容：大阪湾の環境の過去、現在について、博物館のこれまでの独自の生物調査や、市民の協力を得た大規模な調査に基づき、大阪湾の自然と生物多様性を標本や写真、模型、わかりやすい解説などで紹介した。また、漁業などを通じた人との関わりも紹介し、関連行事も行いながら、大阪湾の将来を考える際のヒントとして紹介した。尚、本企画展は、行政・市民・研究者の連携により進められてきた大阪湾再生行動計画をさらに発展・継承させるプログラム「大阪湾 Years」の一環として開催した。
- ⑱名 称：海
主 催 者：京都大学総合博物館
開催時期：平成25年7月31日（水）～平成25年12月1日（日）
場 所：京都大学総合博物館
内 容：水惑星といわれる地球をもっとも特徴付けているのが海であり、この海について京都大学では多様な視点から研究を展開している。本企画展は、その成果を中心に海についての最新像を俯瞰していただく興味深いトピックで構成した。関連展示・レクチャー・ワークショップ・展示解説などを通じて、海の現状や研究の現場をお客様に理解してもらえる機会を作った。

⑱名 称：水草展
主 催 者：独立行政法人国立科学博物館（国立科学博物館筑波実験植物園）
開催時期：平成25年8月10日（土）～平成25年8月25日（日）
場 所：国立科学博物館筑波実験植物園
内 容：水草の生物学的な面白さと観賞的な美しさという2つの視点を通して、広く一般の方の水草への興味を喚起し、水環境の危機的状況や保全への理解を促進した。「水草の進化と生態の不思議、水草の美しさを楽しむ、水草に触れる」などの構成により開催した。

⑳名 称：大隅国建国1300年記念・黎明館開館30周年記念合同巡回企画展
「大隅国建国と大隅正八幡宮の至宝～湾奥の古代・中世～」

主 催 者：大隅国建国1300年記念事業実行委員会
開催時期：①平成25年 9月 3日（火）～平成25年10月 6日（日）
②平成25年10月16日（水）～平成26年 1月13日（月）
場 所：①隼人歴史民俗資料館
②鹿児島県歴史資料センター黎明館
内 容：和銅6（西暦713）年に建国された大隅国は、平成25（西暦2013）年に建国1300年を迎える。大隅国府が湾奥に設置された意義やその時代背景を市民及び県民に周知するために、企画展を開催。第1部 建国前夜（古墳時代）の大隅国、第2部 大隅国の成立と展開、第3部 大隅国の公的施設・庶民の暮らし、第4部 仏教文化の広がりや祈り・墓、第5部 官道（西海道）と海の道、第6部 大隅正八幡宮宮内遺跡と鹿児島神宮の至宝などの内容で開催した。

㉑名 称：第9回特別展 光太夫を生んだ船文化 - 白子廻船とその周辺 -
主 催 者：鈴鹿市（大黒屋光太夫記念館）
開催時期：平成25年9月21日（土）～平成25年11月17日（日）
場 所：大黒屋光太夫記念館
内 容：かつて伊勢湾には多くの廻船の拠点があり、賑わいをみせていた。中でも、大黒屋光太夫が属した白子廻船は江戸の木綿問屋仲間である伝馬町組・白子組それぞれに従属する積荷問屋が置かれ、木綿をはじめとする多くの荷物が白子から出荷された。本展示では、白子廻船を中心に、志摩・熊野・知多半島などの廻船資料を展示し、伊勢湾廻船が担った物流や造船など光太夫を生んだ船の文化について紹介する。

㉒名 称：開館30周年記念「加賀市の船絵馬」展
主 催 者：加賀市北前船の里資料館
開催時期：平成25年9月21日（土）～平成25年11月10日（日）
場 所：加賀市北前船の里資料館
内 容：加賀市には幕末から明治時代にかけて北前船主を多く輩出した地域があり、市内の神社には数多くの船絵馬が奉納されている。開館

30周年の節目に、改めて市内に残された船絵馬を調査、展示するとともにすべての船絵馬を掲載した図録を作成し、加賀市における北前船が残した軌跡を見つめる機会として、郷土の歴史遺産の価値を再確認した。

- ②③名 称：平成25年度八重山博物館企画展
「海に沈んだ歴史～タイムカプセルを探してみよう～」
主 催 者：石垣市教育委員会（石垣市立八重山博物館）
開催時期：平成25年10月1日（木）～平成25年11月2日（土）
場 所：石垣市立八重山博物館
内 容：海に囲まれた国、日本。その中でも南端に位置する八重山諸島は南の玄関口として、地理的にも特殊な場所である。この地には、数百年も前から多くの船が行きかい、そしてその途中には、いくつもの船が沈んだ。今回の展示会では、特に琉球王国時代の沈没船に水中文化遺産という視座から焦点を当て、そこから何が見えてくるかを紹介した。
- ②④名 称：アジアが初めて出会った有田焼―蒲生コレクションを中心に―
主 催 者：有田町（有田町歴史民俗資料館）
開催時期：平成25年10月1日（火）～平成25年11月30日（土）
場 所：有田町歴史民俗資料館
内 容：アジアに渡った有田焼を通して、日本とアジアの交易関係を紹介し、鎖国政策下にあっても海でアジアや世界とつながっていた日本について紹介した。アジア向けの磁器を生産した有田の窯跡出土品、当時の海外貿易港の長崎から出土した資料、東南アジアに運ぶ途上で遭難して海に沈んで海岸に打ち上げられた資料、海外貿易港の長崎や重要な輸出先であったフィリピンなどから出土した資料の展示も行い、有田焼のアジア貿易をふりかえった。
- ②⑤名 称：企画展「川が結ぶ―東北地方と江戸を結んだ利根川水運―」
主 催 者：千葉県立関宿城博物館
開催時期：平成25年10月8日（火）～平成25年12月1日（日）
場 所：千葉県立関宿城博物館
内 容：東日本大震災の復興に向けて、様々な支援や活動がなされており、物資だけでなく人と人との結びつきが見直されている。江戸時代以降の利根川水運においても、東北地方と江戸を結ぶ中継として境や関宿などの河岸が重要な役割を担い、東北地方の米や作物は江戸の人々の生活を支えるなど、川を通じて互いに強く結ばれていた。本企画展では、東北地方と江戸を結ぶ関宿・境を通る輸送経路と河岸にスポットをあて、水運によって両者がどのように結ばれていたのかを紹介した。
- ②⑥名 称：平成25年度 苫小牧港開港50周年記念企画展
「夢を形に～砂浜と原野にいだんだ時代～」
主 催 者：苫小牧市美術博物館

開催時期：平成25年10月12日（土）～平成25年11月24日（日）
場 所：苫小牧市美術博物館
内 容：江戸時代より北海道から本州へ物資を運ぶ役割を担っていた歴史を導入部とし、以降内陸を掘り込んでいく過程をドキュメントとして撮影した写真集のプリント写真や地図、浚渫船模型などから苫小牧港が形成されるまでを紹介した。併せて現在の港の役割を知る資料や港をテーマとした絵画作品を展示して市民と歩んだ港の50年を振りかえった。

⑳名 称：企画展「キリシタン—海が伝えた信仰文化—」
主 催 者：平戸市教育委員会（平戸市生月町博物館・島の館）
開催時期：平成25年10月12日（土）～平成25年11月24日（日）
場 所：平戸市生月町博物館・島の館
内 容：平戸は、9世紀の日中間の航路（大洋路）成立以来、800年にわたり窓口の役割を果たしてきた。16世紀の大航海時代、キリスト教が到来しキリシタンの信仰形態が作られたが、その後の禁教の時代に継承されたのも、海でのなりわいがあったの事だった。企画展では近年の研究で得られた新たな知見に基づき、かくれキリシタン信仰の豊富な資料を活用し、海と結びついたキリシタンの歴史と文化の実像を紹介した。

㉑名 称：特別展 紀伊国栲田荘と文覚井 —水とともに生き、水を求めて闘う—
主 催 者：和歌山県（和歌山県立博物館）
開催時期：平成25年10月26日（土）～平成25年12月1日（日）
場 所：和歌山県立博物館
内 容：二枚の栲田荘絵図を並べて展示し、神護寺と栲田荘との関わりを考える。また、栲田荘の基幹水路であった文覚井（和歌山県指定史跡）の歴史を明らかにし、栲田荘や周辺地域に住んだ人々の生活の営み（土地の開発や水争い）を紹介した。さらに、栲田荘の用水路を整備し、荘の鎮守であった宝来山神社・神願寺（神宮寺）を再興するなど、戦国時代から江戸時代初頭に活躍した是吉（土豪）の事績も紹介した。

㉒名 称：対馬藩と朝鮮通信使～12万点の宗家文書が語る歴史の真実～
主 催 者：長崎歴史文化博物館
開催時期：平成25年10月26日（土）～平成25年12月15日（日）
場 所：長崎歴史文化博物館
内 容：中世以来朝鮮外交を担い、江戸幕府からは十万石以上格の大名として格付けされ江戸時代を生き抜いた、対馬藩とは何かを、徳川将軍の対馬藩主との関係を示す古文書等にて紹介した。また、朝鮮通信使の姿と残された足跡を国内外の逸品で紹介し、外交・藩政・幕府など多方面で活躍した対馬藩の記録を一堂に集め、江戸時代以来綿々と受け継がれてきた宗家文庫資料を基に紹介した。

- ③〇名 称：平成25年度 特別展「鮫のフカいい話」
 第一部「鮫の世界を觀ろ!!」
 第二部「もっと教えよう!!鮫の世界」
 主 催 者：神戸市立須磨海浜水族園
 開催時期：平成25年7月20日（土）～平成26年2月28日（金）
 場 所：神戸市立須磨海浜水族園
 内 容：サメの祖先が初めてこの地球上に出現したのは約4億年前であり、太古の昔より今に至る長き時間の中でほとんど姿を変えることなく存在し続けてきた鮫。現在の海でも生態系の頂点に君臨する種族に、これまでにない角度からスポットを当て開催した。軟骨魚類の秘密や意外な事実、生体、画像、標本などで約100種の日本産のサメ類を展示した。
- ③①名 称：お殿様の船—高松藩御座船・飛龍丸と四国の御座船—
 主 催 者：香川県立ミュージアム
 開催時期：平成25年11月14日（木）～平成25年12月24日（火）
 場 所：香川県立ミュージアム
 内 容：大名の乗る御座船は参勤交代で用いられ、大名の権威を示すため豪華な装飾を施すことによって海上の城というべき威容を誇った。高松藩の御座船飛龍丸を描いた絵図を中心に、四国内の大名の御座船などをあわせて紹介し、海の名文化について考える機会とした。
- ③②名 称：となりの大阪湾 大阪湾 Years 連携企画展事業
 主 催 者：きしわだ自然資料館
 開催時期：平成25年12月1日（日）～平成26年3月2日（日）
 場 所：きしわだ自然資料館
 内 容：大阪湾は多くの人々がくらす都市に近い海であるにも関わらず、地域住民に十分親しまれているとはいえない状態にある。今回は大阪湾の自然を中心とした展示を行うことで、身近な海である大阪湾により親しんでもらうことを目的に開催した。なお、本企画展は、行政・市民・研究者の連携によって進められた大阪湾再生行動計画をさらに発展・継承させた「大阪湾 Years」の一環として開催した。この連携は、平成22年度に船の科学館で行われた「海と船の博物館ネットワーク会議」とも共通し、その成果は本企画展を進めるうえでも大いに有用なものとなった。
- ③③名 称：企画展 指宿まるごと博物館V
 「小野民俗学と『薩南民俗』からみた指宿の民俗」
 主 催 者：指宿市（指宿市考古博物館 時遊館COCCOはしむれ）
 開催時期：平成25年12月7日（金）～平成26年2月16日（土）
 場 所：指宿市考古博物館 時遊館COCCOはしむれ
 内 容：指宿と沖縄・奄美との海洋を越えた交流は、史実的には慶長14年の島津氏による琉球侵攻に始まるとされているが、それ以前にも同じ文化圏に属する地域として密接な関係が窺えるような伝

統行事や郷土芸能が残っている。これらについて、県立指宿高等学校で生物を教鞭取っていた民俗学者の小野重郎が、生徒達と一緒に聞き取り調査・整理・報告したあらゆる民俗について紐解き、海洋を越えた交流による統行事や郷土芸能、漁業等について、その実物を展示した。

- ③④名 称：特別展「伊勢湾をめぐる交流」
主 催 者：鈴鹿市（鈴鹿市考古博物館）
開催時期：平成25年9月21日（土）～平成25年11月24日（日）
場 所：鈴鹿市考古博物館
内 容：鈴鹿市の海岸からは知多半島・渥美半島が望め、陸上交通が発達した現代では遠く感じるが古代から近世まで伊勢湾が主要な交通・輸送路であった。今回の展示は主に古墳時代の画文帯神獣鏡・淡輪系円筒埴輪・岸岡窯産脚付短頸壺・尾張産須恵器・三河湾型製塩土器などの考古資料を紹介し伊勢湾をめぐる交易と文化の広がりについて示し、伊勢湾における漁具や特産品を示す木簡、船形埴輪や船形須恵器、船形木製品など海上交通に関する資料も紹介した。
- ③⑤名 称：大阪湾にやってきたマッコウクジラ～クジラのホネがみられるぞお～
主 催 者：神戸市立須磨海浜水族園②「大阪湾にやってきたマッコウクジラ」
開催時期：平成26年1月30日（木）～平成26年2月25日（火）
場 所：神戸市立須磨海浜水族園
内 容：2010年5月に、ハクジラの中では最大種のマッコウクジラが、大阪湾にストランディングした。私たちの身近な海には、なかなか出会うことのできない生きものたちが多く生息しており、時にこのような形で出会うことがある。本企画展では、このマッコウクジラのストランディング個体の全身骨格標本（大阪市立自然史博物館所有）を展示し、大阪湾をはじめとする海洋環境へ興味や関心を持っていただけるよう普及啓発を行った。
- ③⑥名 称：海を越える太地
主 催 者：太地町歴史資料室（太地町立石垣記念館、太地町立くじらの博物館）
開催時期：平成26年2月1日（金）～平成26年3月15日（金）
場 所：①太地町立石垣記念館
②太地町立くじらの博物館
内 容：およそ一世紀に及ぶ太地の地先の海を遥かに越えて行われた太地の人々による様々な漁業の歴史を考察し、様々な獲物を追って世界中の海に生きた太地の人々の姿を振り返った。また太地の人々はどこに暮らそうとも故郷太地と強い関係を保ち、交流は現在も続いており、オーストラリア・ブルームとの姉妹都市交流や在米太地人系クラブとの交流など、現在も続く太地関係者間の国際交流にも焦点を当てた。アメリカ、カナダ、オーストラリアに関する展示は太地町立石垣記念館に、南極海に関する展示は太地町立くじらの博物館に開設した。

③7名 称：戦艦大和―坊ノ岬沖海戦―
主 催 者：南さつま市(南さつま市坊津歴史資料センター輝津館)
開催時期：平成26年2月15日(土)～平成26年3月16日(日)
場 所：南さつま市坊津歴史資料センター輝津館
内 容：鹿児島県南さつま市の坊津の沖合は、昭和20年4月7日、戦艦「大和」の最後の舞台となった「坊ノ岬沖海戦」が行われた場所である。当該企画展では、恒久の平和を祈念し、呉市所蔵の「大和」引き揚げ資料等を中心に、戦艦「大和」と「坊ノ岬沖海戦」について展示・紹介を行った。沖縄への途上、戦艦「大和」沈没地点を沖にする南さつま市において戦艦「大和」に関連する実物資料を企画展の中心となる特別展示品として陳列、また戦艦「大和」と「坊ノ岬沖海戦」についての展示解説パネル、関連模型、戦艦「大和」の沈没地点を示す大型地図等を展示した。

③8名 称：海藻いろいろ―千葉県豊かな海から―
主 催 者：千葉県立中央博物館分館海の博物館
開催時期：平成26年2月15日(土)～平成26年3月15日(土)
※3月16日から5月6日までは自主開催
場 所：千葉県立中央博物館分館海の博物館
内 容：千葉県の海藻に焦点を当て、その種類や生態系での役割、食品に代表される海藻と人々の暮らしとの関わりなどについて紹介し、海洋生物の中では脇役ととらえられがちな海藻の世界について、多くの人々に知ってもらった。関連講座「海藻おしばを作ろう」なども開催した。

③9名 称：平成25年度春の展示 水辺の記憶―写真家林辰雄のまなざし―
主 催 者：千葉県立中央博物館
開催時期：平成26年3月8日(土)～平成26年3月15日(土)
※3月16日から5月25日までは自主開催
場 所：千葉県立中央博物館
内 容：高度経済成長の時代、生活は大きく変化を遂げ特に首都東京に隣接し、北に利根川と手賀沼・印旛沼水系を有し、残り三方を海に囲まれた本県において、東京湾や印旛沼・手賀沼の開発がもたらした水辺の風景や生活の変化は、激動の時代を象徴するものといえる。林辰雄写真資料から、経済成長と引き換えに失った、水とともにあった暮らしを紹介した。

2. 巡回展の開催(6館)

日本全国の博物館や水族館等を対象に公募し、応募のあった5館に「海と船の巡回展」アイテムを貸し出し、展示を実施した。

また、経年劣化した巡回展アイテム1号機・2号機・3号機の定期メンテナンスのためオーバーホールを実施した。

- ① 主催者：大分県マリンカルチャーセンター
開催時期：平成25年7月25日（木）～平成25年9月1日（日）
場所：大分県マリンカルチャーセンター
- ② 主催者：西南学院大学博物館
開催時期：平成25年9月10日（火）～平成25年9月28日（土）
場所：西南学院大学博物館
- ③ 主催者：一般財団法人 境港市文化振興財団
開催時期：平成25年7月27日（土）～平成25年9月1日（日）
場所：境港市海とくらしの史料館
- ④ 主催者：みちのく北方漁船博物館
開催時期：平成25年9月15日（日）～平成25年10月14日（月）
場所：みちのく北方漁船博物館
- ⑤ 主催者：特定非営利活動法人 おおもりみなとクラブ
（青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸）
開催時期：平成25年5月9日（木）～平成25年7月7日（日）
場所：青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸
- ⑥ 主催者：海フェスタ秋田市実行委員会
開催時期：平成25年7月13日（土）～平成25年7月15日（月）
場所：ポートタワーセリオン2F イベントホール

3. 「海と船の博物館ネットワーク」WEBサイトの保守、運用
インターネットを活用し、「海と船の博物館ネットワーク」事業内容と、「海と船の企画展」募集関連情報及び「海と船の巡回展」募集関連情報の公開を実施した。なお、WEBサイトのリニューアル準備に伴いWEBサイトを一時縮小し、船の科学館WEBサイト上から情報の公開を行った。

4. 企画展支援館の研修会の開催（開催の中止）
過去、「海と船の企画展」支援や「海と船の巡回展」を開催した博物館等を対象に、支援企画展の成功事例紹介、参加博物館同士の情報交換や相互連携を目的とする「海と船の博物館ネットワーク研修会」については、本事業全体の抜本的な見直しの途中であり、本研修会の位置付けを再度整理する必要があるため、開催を中止した。

5. 博物館の海洋教育実施状況の調査（新規実施）
本事業の目的を達成するためには『「海洋」への興味喚起』から『社会教育における「海洋教育」の推進』へと変更する必要があるため、本事業の抜本的な見直しが必要となったため、現状の全国博物館での海洋教育実施状況や、海洋教育

実施のためのニーズを把握するために、全国の様々な館種・分野・立地の博物館1,000館を対象とした海洋教育実施状況のアンケート調査を行った。

6. 博物館関係有識者事業検討委員会の開催（新規実施）

本事業の抜本的な見直しに際し、海洋教育実施状況のアンケート調査結果を基にした新たな事業内容の構築をすることとなった。それに伴い、全国博物館の有識者及び海洋教育に関する有識者による「海と船の博物館ネットワーク活動事業の抜本的な見直しに関する有識者懇談会」を開催し、各有識者から本事業の効果的な実施のための意見を集め、新規事業案の構築に役立てた。

事業目標の達成状況

1. 「海と船の企画展」への支援

実施39企画展ごとに目標達成状況は異なるが、相対的に見て地域性を活かした企画展を通して、海洋及び海事知識の啓発を広く図ることができた。

「海と船の企画展」入場者数各館合計1,307,215人

① 主催者：八戸市水産科学館マリエント

入場者数：63,075人

成果：目標入場者数をほぼ達成し、オープンから26年の歴史のなかで、最高の入場者数を記録した初年度（平成元年度）を除けば最多となる入場者数であった。支援による展示新設備（円形水槽）の設置と広報の強化が入場者増加に繋がったものと考えられ、なかでも製作した円形水槽を用いて11月から開催した「好適環境水」を用いた展示は、北海道・東北地方では初めての試みとなり、海水魚と淡水魚が一緒に泳ぐ「だまし絵」のような水槽を見るために、地元はもとより、市外、県外、更に遠方では宮城県からお客様が足を運んでくださり、水産業の町”八戸”において、”最先端の水産科学”に触れることのできる機会となった。

② 主催者：関門海峡ミュージアム（海峡ドラマシップ）

入場者数：7,412人

成果：精巧で緻密な世界の帆船模型150隻をケース等には入れず、間近で見られるように展示した。制作期間や作り方など入場者からの質問も多くあり、興味の高さが伺えた。昨年は11月に大きなイベントが無かったこと、また新規オープンした旧大連航路上屋を第2会場としたことで、目標入場者数の123%と大きく伸び、日本丸と海王丸が2隻同時寄港したことで、より一層の集客効果が出た。本物の帆船と帆船模型を見比べて楽しんで頂くという狙いは、相乗効果を生み、また150隻の帆船模型展示という規模は、他にあまり無いものだと思われる。通常の施設入場者よりも遠方からの入場者も多く、他の展示会と差別化も図れたと考えられる。展示会場が施設の奥の方にあるため目立たない部分もあるが、誘導サインをもつ

と作る等しても良かったのではと感じた。

③ 主催者：兵庫県立考古博物館

入場者数：14,740人

成果：『播磨国風土記』編纂から1300年を記念した特別展として、神・人・山・海をサブタイトルに、考古資料や文献資料を駆使し、1300年前の人々が今に伝えてくれた播磨地域の歴史、豊かな自然と産物、人々の暮らしに触れ、先人の息吹を感じるとともに、“ふるさと再発見”の契機とすることができた。

また、関連事業として6回の講演会を開催し多くの聴講者を集めた。遺跡ウォークも募集とともにすぐに定員に達し、「考古博であそぼう」等のイベントもおおむね好評であった。観覧者数の目標は、約12000人に設定していたが、目標値より約2800人上回った。本特別展は、播磨地域の古代史のテーマとして特に興味関心が高いと考えていたところ、観覧者数は昨年度より少なかったが、7回の講演会の聴講者数もたいへん多く、また図録が約1か月で完売するなど、本テーマを取り上げて開催したことは、有意義であったと考える。

④ 主催者：神奈川県立金沢文庫

入場者数：8,585人

成果：海の守護神であり、地域の主要神社である瀬戸神社の宝物を初めて一堂に紹介することができ、内川入江と平潟湾、江戸湾という海を主体とする景勝地「金沢八景」の中心地に鎮座する瀬戸神社が、中世に遡って鎌倉時代からの由緒を持つ神社であることを位置づけるとともに、江戸時代の瀬戸神社や神職の姿、瀬戸周辺の人々の信仰、金沢八景の繁栄と人気などを、金沢区民を中心に周知することができた。

観覧者数の目標は10,000人であったが達成できなかったが、観覧者の満足度はかなり高かったと思われる。特に金沢区民にとってはいつも通る瀬戸神社にこれだけの文化財が残っていることに驚愕する声が届いている。また、講演会・講座の参加者も多く、見学者・参加者の満足度は高かったと思われる。

⑤ 主催者：西南学院大学博物館

入場者数：3,551人

成果：目標入場者数の78.9%という結果であったことは、天候不順もあり、昨年より入館者数が減少したこともあるが、マスコミを活用するなど、本事業のPR不足だったと思われる。

しかしながら共同企画という体裁をとったことから松浦史料博物館から講師を派遣してもらえたことは来館者サービスの向上につながった。現地の学芸員による説得力のある講演会は聴講者にも好評だった。こどもワークショップの実施によってこれまでにない層の来館に恵まれた。そして子供用のリーフレットを作ったことが大人にも好評で、結果的に見学の補助教材として、おお

いに活用された。他の博物館からも問い合わせがあるなど、良い製作物となったと考えている。

⑥ 主催者：口之津歴史民俗資料館・海の資料館

入場者数：1, 740人

成果：ボトルシップを初めて見たという方が多く、精巧に作られた作品に質問が集中した。

見学者数は目標の87%に達したので、一応の成功と思われる。ボトルシップを購入できないかとの要望も10人以上に及んだ。

成功の要因としては、船員の多い町として港や船員に関心が高く、口コミや市内全域にチラシ配布したため、見学者が多かった。また、失敗の要因としては、マリンフェスタ in くちのつの主会場から離れた場所であり、交通の便が悪いことが考えられた。

⑦ 主催者：萩博物館

入場者数：40, 418人

成果：市内および県内の人々の間で「夏休みは萩博物館へ！」という雰囲気はかなり定着しているなかで、「海」「川」に関わる生物を含めたテーマのもとに「トレジャーアニマル探究記」～海と山に珍獣・希少生物を求めて～を開催した。しかし会期中に萩市北部が豪雨災害を受けたことなど諸々の理由により目標来場者数の達成が困難と想定されたため、急きょ「萩市集中豪雨災害支援チャリティーイベント秘蔵のトレジャーアニマル・ダイオウイカ&リュウグウノツカイと大接近！」を4日間限定で実施した。

本展の来場者数は申請時の来場者数目標55, 000人の73.5%となる40, 418人に留まり、当館が開館以来これまでに開催した特別展・企画展としては第4位となったが一方で、急きょ実施した「萩市集中豪雨災害支援チャリティーイベント秘蔵のトレジャーアニマル・ダイオウイカ&リュウグウノツカイと大接近！」は4日間の参加者の合計が2, 817人と、当館がこれまでに開催したあらゆるイベントの中で最高値となった。成功の要因としては、展示物がもつ潜在力やメッセージを最大限発揮できるような演出と、来場者が主人公となり展示会場を巡ることができるような冒険ストーリーの設定と、それに沿った迷路のような順路を作った事であり、アンケート結果から約90%の来場者が満足したと回答している。

⑧ 主催者：株式会社海の中道海洋生態科学館（マリンワールド海の中道）

入場者数：199, 669人

成果：水族館ではあまり展示されることがない陸棲哺乳類の標本を展示することで、意外性を持たすことができた。特にカバ骨格標本の大きさはインパクトがあり、アイキャッチとして機能した。当初目標であった、海獣類の体の特徴、水中環境への適応についての理解は、海獣類の標本と比較展示することで進んだものと思われる。

期間中の入館者は目標の106%と上回っていたが、開催場所が順路からは外れていたため、会場まで来館者が足を運びにくい面もあり、入館者のすべてが展示を見られたわけでない。解説員によるガイドなども実施したが、場所がわかりにくいという物理的制約を解消することはできなかった。

⑨ 主催者：沖縄県立博物館・美術館

入場者数：32,110人

成果：目標「入館者4万人」に対し「約3万2千」は80%の達成率であり、まずまずの結果といえる。関連催事も好評で、おおむねどのイベントも定員超の応募があった。特に、実体験を伴う小中学生向けの実習は、夏休みということもあり、どれも充実した内容との感想を得た。

博物館主催の特別展としては、開館史上2番目の入館者数を記録した。

一概に入館者数のみをもって成功/失敗を語ることはできないが、多くの方々に観ていただいたことで、「生物多様性」の意味を、少なからず県民に広く知らしめたことは間違いなく、その意味で今回の展示会は成功したと言って良い。成功した原因は対象年齢を、夏休みの子どもたちに絞り、わかりやすい展示を心がけたことによるところが大きいと思われる。

⑩ 主催者：今治市（今治市村上水軍博物館）

入場者数：10,682人

成果：これまで調査を行ってきた海底の文化財の価値や魅力、調査研究の必要性について、地域住民をはじめ多くの来館者に伝えることができた。また学習補助教材を作成・配布することにより地域の歴史学習の一助となった。目標入場者数の89%とやや及ばなかったが、展示監視員やボランティアによる丁寧な展示解説により、個々の来館者への充実したサービスを提供できた。来館者の当館への期待は村上水軍あるいは海賊の歴史にあり、密接に関連するテーマや展示物でありながら、その関連性を十分に広報できなかったことが目標入場者数に到達しなかった要因の一つと推測する。来館者のほとんどは展示内容に満足していた印象であったため、タイトルやチラシ・ポスターなど宣伝となる広報物に工夫が必要である。

⑪ 主催者：ミュージアムパーク茨城県自然博物館

入場者数：98,745人

成果：7月および8月の入館者数は例年になく順調に推移し、8月末時点では当初目標に設定していた10万人達成がほぼ確実な状況にあったが、9月に2週連続であった3連休（14～16日と21～23日）の内、最初の連休が愛知県に上陸した台風18号の通過と重なってしまい、この期間の入館者数が4,235名（翌週の連休中入館者数7,818名）となったことが結果として目標の達成に大きく影響してし、目標の98.7%という結果になって

しまった。
企画したイベントのうち、記念講座と自然講座は定員に達せず残念な結果となった。今回のイベントは、従来のものより対象年齢を高く（中学生以上）し、より高度な内容を取り扱うことを特徴としたが結果として当館の利用者の大多数である未就学児や小学生を伴った家族連れが参加できないことになり、定員に達しなかった。その一方で、参加したシニアや中学生などからは講師のより専門的な話や高度な技術に触れることができたことと好評であった。自然観察会は、定員 30 名に対して 132 名の応募があり、館内でも注目のイベントとなったが、前述の台風 18 号による那珂川の増水、築の破損により開催中止となってしまった。
支援によって製作した電子式模型「サケのからだの模型」や「回遊魚の回遊環パズル」は、企画展開催期間を通して特に小学生以下の来館者に人気の展示物となり常に人だかりができていた。また「ボラの成長はく製」は成長と共に名前が変わる“出世魚”の紹介として見学者の興味や関心を高め理解を深めることにおいて有効な展示物となった。

⑫ 主催者：神戸大学大学院海事科学研究科海事博物館

入場者数：1,071人

成果：来館者数に関しては、目標の107%と目標を達成するに留まることとなった。進水式は知っていても船ができるまでのどの段階なのか知らない来館者に対して船ができるまでの段階と進水式の位置づけを理解して頂けた。

今まで公開することのなかった博物館に所蔵していた進水式絵葉書コレクションを公開することができた。

進水式絵葉書の存在は知っていても、いつ、どのように始まりどのように作成されたのか等まとまった資料が乏しい現状であったがそれらの内容に関してまとめることができた。

進水式絵葉書は珍しいものではあるが、多くの来館者にとっては単なる絵葉書でしかなかったようであるため、最初に進水式絵葉書の役割・位置づけなどをもう少しわかりやすく理解して貰えるような展示が必要であったと思われる。

⑬ 主催者：和歌山市（和歌山市立博物館）

入場者数：1,474人

成果：海浜周辺部の遺跡から出土した生業に関する考古資料の中に、現在でも使用されているものが少ないことから、人間の根本的な生活様式が昔とそれほど変わりが無く、連綿と受け継がれてきていることを来館者に理解して貰えた。しかし、当初目標の入館者数の73%となり、目標を達成できなかった。展示内容は海に関する考古資料を中心に展示し、テーマを「海人の世界—発掘された海辺のくらし—」としたが、もう少し親しみやすいテーマの工夫を考える必要があった。また、海に関するわかりやすい資料を多く展示することができたが、これらの資料を補足する図やパネル

などを使った補足説明が不十分であった。また、海に関する考古資料は企画として興味をひくものであったが、小中学校の教科書ではあまり登場しない。このため重要文化財も展示し入館者増に努めたが、目標を達成できなかった。

⑭ 主 催 者：五島観光歴史資料館

入場者数：4, 857人

成 果：当初の目標は2, 500名に設定していたが、開催前の広報活動などから、例年の同一期間の入館者数である約2, 000名に対して、2, 000名増の4, 000名を館の独自目標として上方修正し設定した。これに対して最終的な入館者数は4, 857名であり、対目標入館者割合は121.42%であった。

昨年と同様に市内小中学生の期間中の入館料無料化によるリピーター増、及び市内小中学校の全ての児童生徒へチラシを配布したことで家族連れの入館者が大幅に増加した。また企画展テーマを普段から五島市民に親しまれている河童、及び妖怪としたことが幅広い年齢層に受け入れられ、入館者増につながったと考えられる。

⑮ 主 催 者：笠岡市教育委員会（笠岡市立カブトガニ博物館）

入場者数：16, 921人

成 果：期間中の入場者数について昨年と同人数を目標にしていたが95%にとどまった。昨年度は市制施行60周年、また入館者数160万人達成ということで記念事業等を合わせて行ったが、本年度は特に関連行事、関連事業を行わなかった。また、職員の異動等もあり広報活動等がうまくできなかったことが入館者増に繋がらなかったと考えられる。

⑯ 主 催 者：尚古集成館

入場者数：63, 710人

成 果：一般向け講座が定員をはるかに超える方々が応募され、当企画展示に関して強い関心を持つ方々が多かった。また、薩英戦争は様々な切り口で説明することができ、今までにない講座と食事を合わせた企画などを実施し、参加者からは高い評価をいただいた。

職員が関係した講演会・講座などを通じて、海の向こうに視野を広げていた島津家がイギリス海軍との戦いで善戦し、両者の交流のつながりが日本とイギリスの友好関係の原点であったことが強く発信された。

一方で、薩英戦争について県内・市内でさかんに取り上げられた結果、尚古集成館の展示自体がかすんでしまい、目標としていた人数の約85%にとどまり、前年と比べても98.5%と微減している。

⑰ 主 催 者：公益財団法人大阪市博物館協会（大阪市立自然史博物館）

入場者数：20, 660人

成 果：会期中の総入場者数は20, 660名で、2万人は超えたものの、目標とした28, 000名に対して達成率は73.8%となった。

有料入場者率は31.5%で、これは他の自主企画展並みであった。今回、特別展の内容に則した中高生向けワークシートを作成し、近隣校に課題採用を依頼した。これにより、高校16校、中学5校、大学1校に採用して頂き、ワークシート持参入場者は1,014名となった。この来場者数は昨年度の自主企画展のワークシート持参入場者数(871名)よりも多い数値であった。入場者アンケートの分析(回答率1.6%)では、展示に関する満足度は半数以上が満足と答えた。また、展示の解説文は72%がわかりやすいと回答した。特に今回作成した展示物(マッコウクジラ全身骨格標本、大阪湾海底地形模型、大阪湾全沿岸連続写真)については、面白かった展示として回答した人は多かった。入場者数そのものは目標値に達しなかったものの、関連イベントとしては18種程度を企画し、それらの参加者数としては1,500名弱となった。関連イベントは特別展のテーマ内容をより具体的に伝える手段として機能するが、これらの開催と参加によって質的に高いレベルでの普及教育効果があったと考えられる。

⑱ 主催者：京都大学総合博物館

入場者数：23,222人

成果：展示には予想以上の来館者があり、内陸部に位置する京都市民に対しても海についての啓発がある程度の成果を収めたと考えられる。入場者数が目標及び前年度の数を大幅に上回ったのは、展示の企画に参画した松岡廣繁理学研究科助教をはじめとする教員の熱心な関与や適切な広報(地下鉄のつり広告、新聞等報道機関での紹介記事)が功を奏したと考えている。期間限定の映像展示については、開催期間が短いなどの残念がる声が寄せられた。予算との関係もあるが、今後魅力あるイベントを長期にわたって開催するための知恵が必要になってきている。

今回の事業では、単に一過性の展示だけでなく、中長期的に海についての魅力を伝えるための仕組み作りをも視野に入れていたが、①展示委員となった教員が啓発活動の重要性と楽しさに開眼してくれたこと、②スナメリ展示キットや③「三葉虫を調べよう」の冊子、④展示に合わせての「海は百面相」の出版など、本事業終了後も海についての啓発活動が可能な土台づくりを行えたことが成功要因となっている。すでに、京都府北部の中高一貫校などから、次年度にスナメリ骨格標本等を使っての学校内での展示の可能性の打診が来ており、継続とともに、裾野の広がりが予感される。

⑲ 主催者：独立行政法人 国立科学博物館(国立科学博物館筑波実験植物園)

入場者数：9,935人

成果：当初目標入館者数の5,000名に対し、198%となる9,935名の入館があった。また、アンケートの結果では、満足度は非常に高かった。さらに、本事業の開催趣旨である、「水草の生物学的な面白さと観賞的な美しさという2つの視点を通して、広く一般の方の水草への興味を喚起し、水環境の危機的状況や保全への理解を

促進する。」という点を検討すると、「良かった展示・イベントなど」として、観賞水槽（69%）が多かった一方で、学術展示（流れに生きる水草45%、ミジンコウキクサ観察30%、タヌキモ観察26%）も十分に高く、保全に関する展示も26%となった。これは観賞用の展示を入り口として、学術内容や保全に関心を持って頂くという目的を、ある程度達成できたと考えられる。

入園者数の増加は、2回目の開催であるために「水草展」というイベントが浸透しつつあること、各種のメディアを活用した広報が効果的であったと考えられる。

⑳ 主催者：大隈国建国1300年記念事業実行委員会

入場者数：①隼人歴史民俗資料館 351人

②鹿児島県歴史資料センター黎明館 5,746人

成果：鹿児島県内各地で出土した大隅国に関する遺物を一か所に集めることができ、また、鹿児島神宮の宝物をはじめ、普段見ることができない貴重なものを展示することにより、古代・中世の大隅国について霧島市民、鹿児島県民に広く周知することができ、事業成果は高かったと考える。

入場者数について、隼人歴史民俗資料館は、前年度と入場者数は同程度であり、目標人数には及ばなかったものの、大人の入場者数は倍増であった。前年度同一期間に小学校の社会科見学が3回あったが、今年度は0校であったためである。黎明館については、前年度比及び目標と同程度であった。まずまずの達成度であったと考えられる。

㉑ 主催者：鈴鹿市(大黒屋光太夫記念館)

入場者数：1,123人

成果：来館者に実施しているアンケートによると来館者の満足度は高く、また、展示見学後に白子港周辺の散策に出かけられたという回答も複数あった。白子廻船や湊の歴史への興味を喚起するという目標は達成できたと考える。

来館者数に関しては、目標人数に今一步届かず93%という結果であったが、おおむね達成できたと考える。

キャプションは、デザインと掲示位置を統一するとともに、図表を多く挿入し分かりやすさに努め、好評を得た。

㉒ 主催者：加賀市北前船の里資料館

入場者数：3,659人

成果：当初の独自目標が51日間の会期中4,500名と高い目標設定をしたために達成はできなかったが、前年度の同時期と比較して134%の割合であった。通常は各町の神社拝殿に奉納され一般の目に触れない船絵馬を展示し、まとまった数の資料として展示することで、微妙な差異や船の構造の変化なども紹介した。

旅行者主催のツアー客も多い施設であるが、会期中は資料館で販売している解説書の売り上げが例年の3倍以上の売り上げがあ

ったことから、当企画展を開催したことで北前船に関心の高い個人客が多く訪れたものと思われる。

また、船絵馬を所持する町の町民にとっても、改めて歴史資料としての価値を再認識してもらうことができた。

②③ 主催者：石垣市教育委員会（石垣市立八重山博物館）

入場者数：901人

成果：八重山地域をはじめ、沖縄県内各地の沈没船に関係する水中文化遺産を紹介したが、見学者それぞれの歴史の視野をあらたに広げる一助になったのではないかと考えられる。

前年度同一期間の入場者数507名に対し901名の来館があり、対前年度比は177.7%となった。独自目標に対する比は128.7%であった。これまであまり知られていなかった水中の文化遺産に関する展示会ということで、文化財に関わる地元の関係者や、歴史や文化に興味を持っている多くの市民にとっても目新しく映るテーマであったと思われる。また、今回は多量のチラシやポスターを作成し、従来の企画展に比べて、より広く周知することができた。特に、水中文化遺産という内容から、地元の漁業者やマリンレジャー関係者にチラシによる広報や周知依頼を行った結果、従来の展示会に比べてより幅広い客層の来館に繋がったと考えられる。

②④ 主催者：有田町（有田町歴史民俗資料館）

入場者数：1,975人

成果：当初カンボジアに限った展示となる予定だったが、多くの関係者の協力が得られ、フィリピンやインドネシアも含めた東南アジア全域に関連する大きなテーマの展示となった。一般の人から専門家まで幅広い見学者を対象とすることができ、見学者に対しては概ね満足していただけた。例年、1か月間の開催期間を2か月にしたこともあり、ポスターやチラシの宣伝効果が会期中に入っても効果がみられた。その結果、目標の入場者数をほぼ達成(98.9%)することができた。

②⑤ 主催者：千葉県立関宿城博物館

入場者数：13,298人

成果：展示内容は、水運を利用した東北・江戸間の物流を取り上げたものなので、興味・関心のある来館者が多く、83%が良かったという評価であった。入館者数が目標数よりも1,702名減少したことについては、10月の台風襲来や同月の休日における悪天候が影響したものと考えられる。

関連事業において、歴史講座が定員を上回ったことについては、講師の選定が良かったものと思われる。また、解説会の参加者数が昨年度より上回ったことについては、企画展のテーマが地元の人たちに関心のあるものであったと考えられる。一方、従来から人気の高い野外講座は、悪天候により十分な見学ができ

なかった。

②⑥ 主催者：苫小牧市美術博物館

入場者数：3, 121人

成果：本事業は今年度当市が推進した「未来へ！みなと大作戦」の一環として、苫小牧港開港50周年記念企画展の位置づけで実施した。企画展は、開港以前の歴史から資料を掘起し、江戸時代の船絵馬や古地図などに加え、かつての基幹産業であったイワシ漁業に関する資料などを体系的に展示することにより、これまでの苫小牧港史では、あまり触れられなかった交易の要衝や漁民の視点からの港湾史を観覧者に提示することができた。また、市が所蔵する膨大な港湾建設に関する地図や文書の中から特に重要な資料を紹介するとともに、関係機関から借用した市民が普段目にするものの少ない貴重な資料の展示を行った。さらに市内の写真館が所蔵する1950年代から開港に至るまでのネガフィルムを鮮明なデジタルプリントとしてパネル化し、世界でも類のない貴重な記録写真として公開した。

入場者は目標としていた3,000人を超え、7月下旬の開館以来の総入場者数も1万人に達したため、リニューアルした生涯学習施設としての認知度を高める企画展となり、多くの人に継続的な館の利用を促す成果があったと捉えている。

②⑦ 主催者：平戸市教育委員会（平戸市生月町博物館・島の館）

入場者数：3, 203人

成果：近年さまざまな分野で進捗をみたキリシタン・かくれキリシタン研究の成果を反映し、キリシタン時代の信仰を保存・継承している存在として、かくれキリシタン信仰の要素を紹介することができた。またそうした信仰の背景に、平戸を中継地とする航路の存在があることや、禁教期の信仰が盛んな漁業経済によって支えられた事、外海地方の信者が海伝いに五島などに移住し、やはり漁業の関係することで暮らしを打ち立て信仰を継承した事を伝えることができた。企画展開催の告知をチラシ市内回覧、ポスター配布、同市内掲示でした上、企画展の開催や新発見のお掛け絵について報道発表をおこない、新聞、テレビ等で取り上げられるなどあっても、入館者増に加え、関心がある人が遠方からも来館するなど、目標の5,000人には届かず64%の3,203名ではあったものの、一定の成果はあったと考えられる。

②⑧ 主催者：和歌山県(和歌山県立博物館)

入場者数：4, 863人

成果：本展示館の入館者数については、地元のかつらぎ町や各種団体、所蔵者との関係を密にしたことで、目標の100.7%と概ね達成することができた。

記念講演会については、地元のかつらぎ町や各種団体にも広報の協力をいただいたこともあって盛況に終わった。

一方、物館講座、ミュージアム・トーク博物館講座については、マスコミなどに対する働きかけが弱かったこともあって、目標を下回った。今後、マスコミなどへの働きかけの方法、館独自の広報手段についても検討する必要があると思われる。

②⑨ 主催者：長崎歴史文化博物館

入場者数：15,250人

成果：今回の展覧会は、「対馬藩」「朝鮮通信使」「宗家文書」など歴史中心の難しいイメージが先行した内容となった。開催の大きな趣旨が、対馬藩宗家文庫資料が国重要文化財指定を受けたことからでもあるが、これまで長崎県内の大名関係資料を本格的に取り上げた展覧会が少なかった面もある。今回は、そのことが逆に身近な地域の本格的な紹介として興味を引くことができた。今回は助成金を受けることができ、韓国釜山博物館などからも資料借用を行うなどこれまでにない大規模な展覧会を実施することができた。なかでも海外初出品の朝鮮通信使人形346体や、韓国指定宝物を展示することができ、マスコミ各社からの反応も非常に大きかった。

しかし、全体的に有料入場者が伸びず、昨年度の同時期より減少した原因のひとつに、旅行会社との連携の不備などにより、一般の団体がなかったことが挙げられる。また、県内の小中高生も予想を下回り、学校など教育機関との連携に課題が残った。これらを改善されていれば、学校教育・生涯学習普及の向上という面だけでなく、長崎県の魅力ある歴史や文化の伝承により寄与できたと想定される。

③⑩ 主催者：神戸市立須磨海浜水族園①『特別展「鮫のフカいい話」』

入場者数：558,551人

成果：これまで全国の水族園館で数々実施されてきた「サメ展」の集大成としての意気込みで、最新の知見を交え、約100種のサメ類（生体・画像・標本含む）を展示でき、これまで当園で行ってきた中で最大級の特別展となり、サメ類に対する情報を来園者に提供できたと考える。これまた当園で初の試みとなる特別展を二部構成で実施し、長期間に渡り開催できた。

これまで実施してきた特別展と違い、展示内容を中級～上級設定にしたこともあり、若年層の来園者には少し難解な展示内容であった。今回の特別展はこれまでより規模が大きかった（期間、内容、予算等）にも係らず、その特別展の情報提供がうまく行えず、多数の集客につながるような特別展に持っていくことができず、目標入場者数606,000に対して92%の来館者数となった。

③⑪ 主催者：香川県立ミュージアム

入場者数：6,828人

成果：事業の趣旨は、大名の乗用船である御座船を通じて海の大名文化について考えるものであった。主たる展示資料となった「高松藩

御座船飛龍丸船明細切絵図」8点は香川県指定有形民俗文化財に指定され、その資料的価値は以前から認められるものであったが、大型資料であることから全点同時展示は今まで実現されることがなかった。今回の展示では、初めての全点展示を行い、その資料的価値を十分に公開し、資料を通じて御座船の構造や装飾について理解を得ることができた。

昨年度の入館者数と比較すると約1,000人ほど少ないが、昨年の同時期には特別展が開催されており、特別展が同時開催されていない本年度との差としてはやむを得ない数値であると判断している。12月の入場者数を昨年度と本年度で比較すると約100人増が確認される。これは展示内容についての評価が高かったことを示すものとして考えられる。

展示内容として連動したシンポジウム「船」からみた四国では、専門的な内容のものであったにも関わらず、県内外から150人も参加者があり、展示入場者数も100人を超えている。シンポジウム参加者が展示も観覧したことを示唆するものであり、関連事業としては十分な成果を得られたと考えられる。

③② 主催者：きしわだ自然資料館

入場者数：4,334人

成果：今年度の特別展は、昨年度の同期間における入場者数は超えたものの当初設定していた目標入場者数に到達することができなかった。その理由としては、広報をおこなうタイミングが遅かったためと考えられる。特別展のチラシやポスターを作成するのに時間がかかってしまい、それに伴い広報をおこなうのが特別展開催の直前となってしまった。これは反省点として重く受け止める必要がある。しかし、産経新聞や読売新聞、毎日新聞、南海電鉄の季刊誌が特別展について取材をしており、マスコミからの注目度は高かったと思われる。

内容については、展示の手法に新しい標本作製技術を用いたこともあり来館者からの評判は高かったように思われる。また、行事では大阪湾に関係する地質と化石の観察会やキャラクターデザインの講習会など多岐にわたる内容で行事を行ったため、来館者層も多岐にわたった。

③③ 主催者：指宿市（指宿市考古博物館 時遊館COCCOはしむれ）

入場者数：1,215人

成果：市町村合併後初めて「指宿市の民俗」について海洋からの交流と小野重郎、『薩南民俗』の切り口で開催できた。関連イベントの日曜講座等にも通常より多くの参加者があった。今回の企画展を開催できたことで、指宿市の地域住民が守り伝えてきた海洋の交流による民俗や伝統行事・伝統芸能を幅広い市民に周知することができた。その結果、かつて漁業を営んでいた市民から漁具の使い方などの情報提供を受けたり、小野重郎氏に指導を受けたかつての指宿高校の卒業生が来館し、小野氏のエピソード等を徴集したりす

ることができた。

ただし、日常生活の中に最も密着している民俗であるが、実際は興味が薄い部分であったためか、前年度の入館者数に対して減じた。反省点として、地域公民館の子ども会や伝統芸能保存会に積極的に声かけをする必要があったと考えられる。目標入場者数1,200名に対し、101%の入場者数となった。

③④ 主催者：鈴鹿市（鈴鹿市考古博物館）

入場者数：1,576人

成果：今回の展示では、遠方で出土した岸岡山2号窯産の可能性が高い須恵器脚付短頸壺のうち、現存が確認できるものの大部分を借用することが出来、一堂に展示することで、わかりやすい形で比較し、形状の共通性を確認することが出来たのではないかと考えられる。特に脚付短頸壺においては、市内在住者にとってなじみのある場所で作られたものであり、それが伊勢湾を介して1500年近くも昔に対岸の知多半島やさらにその向こうに広がる三河地域に伝わったことに驚きと興味を持っていただけたのではないかと思われる。目標には満たなかったものの、前年との比較で7割近い入館者の増加となり、チラシの配布による効果もあったと思われ、ある程度の成果は得られたものと考えており地元、鈴鹿市民だけでなく、今回焦点をあてた脚付短頸壺・淡輪系埴輪などの伝播の経路にあたる地域の所蔵者様をはじめとする方々にも興味を持っていただくきっかけとなったことで一定の成果は得られたのではないかと考えられる。目標入場者数2,000名に対して78%となった。

③⑤ 主催者：神戸市立須磨海浜水族園②「大阪湾にやってきたマッコウクジラ」

入場者数：43,878人

成果：本企画展で、骨格標本の組み立て及び解体を休園日に実施するのではなく、その作業も含めて一般公開した。滅多に見ることはできない作業に一般者の関心は高かった。博物館業務を理解し、興味を抱いてもらう良き場の提供ができた。これほどまでの大型標本を借り入れたことはなく、大阪湾をはじめとする海洋環境へ興味や関心を持っていただけた。「大阪湾 Years」の旗のもと、大阪湾を中心とした多種博物館と同年度内に大阪湾をテーマにした企画展を開催できたことは、非常に有意義であった。他園館との新たなネットワークも構築でき、今後企画展を始め研究、調査等にも協同で実施できることも期待できる。年度を通して外部環境の要因（低気温や近隣大型施設の矢次で開業等）により、入園者数の落ち込みが避けられなかったこともあり、本企画展開催中も入園者数が前年比に比べ伸びなかった。目標入場者数の51,000名に対して86%となった。

③⑥ 主催者：太地町歴史資料室（太地町立石垣記念館、太地町立くじらの博物館）

入場者数：①太地町立石垣記念館 401人

②太地町立くじらの博物館 4, 984人

成 果：太地町歴史資料室では太地中学校と連携して移民学習を実施しており、若い世代へ歴史を伝える努力を続けている。本企画展で得られた情報や資料は、今後も様々な形で活用されることが予定されている。例えば今年6月末に和歌山大学を会場に開催される日本移民学会参加者を対象に、太地町歴史資料室は特別巡検プログラムを実施予定で、本企画展を基礎とした展示を計画している。また類似したテーマの共同企画展開催をロサンゼルス全米日系人博物館をはじめとする内外のいくつかの博物館と協議している。メイン会場となった石垣記念館の入場者数は目標を上回っており、さらに内容を改編して提示する企画展の見学者も引き続き期待されることから、本事業はある程度の成果を収めたといえる。

③7 主 催 者：南さつま市(南さつま市坊津歴史資料センター輝津館)

入場者数：2, 404人

成 果：当該企画展では、呉市海事歴史科学館（大和ミュージアム）の協力を得て、同館所蔵の「大和」引き揚げ資料9点を中心に、50分の1スケールの戦艦「大和」主砲塔模型、映画ロケセット用いられた戦艦「大和」主砲身模型や主砲弾模型、350分1スケールの戦艦「大和」模型、展示パネル等を展示し、南さつま市の沖合の海底に眠る戦艦「大和」について、展示・紹介を行った。入館者数という点では、前年度同一期間入場者数比し267%となり、期間内入館者数は申請時目標入館者数に比し240%の目標達成率となった。

③8 主 催 者：千葉県立中央博物館分館海の博物館

入場者数：2, 592人

成 果：入場者数は前年度比59.49%であった。これは、自然災害による影響も認められたが、テーマである海藻そのものに関心のなかった方が多かった可能性があり、より多くの人の来館を促すテーマの設定や、広報の仕方などに問題が残った。
一方で、アンケート結果からは入場者の満足度は高く、海藻に関心のなかった入場者が、本展示を見ることで海藻について新たな知識を得て、満足を得てもらったことにより海藻に対して関心を持ってもらえたことが伺え、海洋生物の中でも比較的地味で注目されにくい生物である海藻について、人々の関心を高めることには成功したと思われる。特に関連講座「海藻おしばを作ろう」においては、これまで海藻にほとんど興味のなかった参加者が、アートの海藻おしばを作製することで海藻に関して深い興味を持ったという感想を述べており海藻という生物に興味関心を持ってもらうきっかけとしては、最適なものであったと思われる。

③9 主 催 者：千葉県立中央博物館

入場者数：4, 385人

成 果：高度経済成長の時代の変化を見つめ、失なわれゆく風景と人々の生活を、膨大な記録写真として残したのが故林辰雄氏である。氏の写真から、かつて水とともにあった暮らしを顧みた。年度末の開催の割に入館者が多く、また企画展会場の滞在時間が長い傾向であった。東京湾や印旛沼など水辺の風景や暮らしについて、あらためて考え、関心を深めていただく機会となったようである。アンケートでも好評の声が多く聞かれ、今後の自主開催期間に向けて順調な滑り出しと思われた。解説キャプションは丁寧な記述をこころがけたことが好評のようであり、目標入場者数4, 000名を超える入場者であった。

2. 巡回展の開催

巡回展展示アイテムの3セット（1号機：10点、2号機：7点、3号機：6点）を、全国6か所の博物館、水族館等において開催し、子供たちを中心とした海洋及び海事知識の普及啓発を図ることができた。

「海と船の巡回展」入場者数各館合計51, 108人

①主 催 者：大分県マリンカルチャーセンター（1号機利用）

入場者数：4, 410人

成 果：夏休みの学習に役立ててもらいたいと、各アイテムのトリビア用紙を置いていたがどんどん無くなっていくのを見ると効果があったようだ。当センターのシンボルでもあるマンボウについてのトリビアは、人気で知らないことばかりで特に大人が驚いた様子だった。遊びながら友達とあれこれ言い合うことで、学んだ情報を共有し自分の中に固めていた。工作で作ったものを実際に水に浮かべその様子を私たちに教えてくるその眼はとてもキラキラしていて知的好奇心を刺激されたようだ。

②主 催 者：西南学院大学博物館（1号機利用）

入場者数：898人

成 果：本事業のギャラリートークを開催し、30名の児童と10名の博物館実習生と学生ボランティアの参加があった。まさに大学博物館を拠点とした実践的教育をおこなうことができ、博物館への理解や海洋教育普及への一端を担う人材育成への効果があった。また海洋教育の効果的な理解と、教育普及を通じて、社会人としての自覚と次世代の博物館界にかかわる人材育成をおこなうことができたことは、本事業の最大の成果と考えている。

③主 催 者：一般財団法人 境港市文化振興財団（2号機利用）

入場者数：3, 663人

成 果：巡回展期間中多くの子供たちに喜ばれた。「スマートボール」は一生懸命遊んで指にまめをつくる子どもがお

り、「親子を探せ」は熱心に学習されていた。「イルカトーク」は親子で交信する姿が良く見られ、家族で楽しんでいた。

④主催者：みちのく北方漁船博物館（2号機利用）

入場者数：758人

成果：30日間、みちのく北方漁船博物館講義室を会場に、海と船の巡回展アイテムである「海の生きものせ〜くらべ」、「進化する船たち」、「泳ぎの回転寿司」の3点を展示した。展示内容に関しては、とくに小学生たちが興味・関心をもったようで、実際に展示アイテムを自ら手にとって体験しながら学んでもらった。あわせてスタッフが相応の解説を行なうことでより一層の理解促進につとめた。本事業の開催によって、地球環境や海洋生物についての知識獲得や理解促進について、地域住民をはじめとしてより多くの方々に広く提供することができたので、相応の成果を得たと評価している。

⑤主催者：特定非営利活動法人 おおもりみなとクラブ

（青函連絡船メモリアルシップ八甲田丸）（3号機利用）

入場者数：12,707人

成果：5、6月は修学旅行で訪れる小・中学生が多く来館し、展示アイテムに興味を持って頂いた。特に「ウミガメオス・メス スマートボール」は展示内容をあまり理解せずスマートボールとして遊んでいた。また7月は最終週であり海と船の巡回展を楽しむお客様が多く訪れた。「俺のクラフト工房」では工作作りに時間を取れないお客様が多かった。ただ、工作の作り方の用紙を持ち帰る方が多く聞いてみると「楽しそうなので家で作ってみます。」や「夏休みの工作の参考にします。」という方も居た。展示アイテムを通して子どもから大人まで海のいろんな不思議を体験して頂けたと思う。目標入場者に満たなかったのは残念だが、開催期間中は多くの来館者に展示アイテムに触れて楽しんで頂けた。

⑥主催者：海フェスタ秋田市実行委員会

入場者数：28,672人

成果：第10回海フェスタ秋田市のメイン会場であるポートタワーセリオンの2階イベントホールにて3日間体験学習を実施した。工作教室やイルカトークなど人気のあるコンテンツをはじめ、家族で楽しんでいただけた。平均滞在時間が40分ということからも、本イベントの目的のひとつである海洋国家日本の未来を担う青少年の教育・健全育成という教育目的は十分達成できたと考えられる。実際に来場者の半数近くが夏休みの自由研究用にと海上配布した資料を持ち帰っていた。

3. 博物館ネットワークの保守、運用

インターネットを活用し、「海と船の博物館ネットワーク」事業内容と、「海と

船の企画展」募集関連情報及び「海と船の巡回展」募集関連情報の公開を実施した。なお、WEBサイトのリニューアル準備に伴いWEBサイトを一時縮小し、船の科学館WEBサイト上から情報の公開を行った。

①アクセス者数（ページビュー数）：35,439人

※集計期間：2013年3月1日～2014年9月30日

②アクセス者の平均閲覧ページ数：

・新規閲覧者：2.02ページ

・リピーター閲覧者：2.61ページ

4. 企画展支援館の研修会の開催（開催の中止）

過去、「海と船の企画展」支援や「海と船の巡回展」を開催した博物館等を対象に、支援企画展の成功事例紹介、参加博物館同士の情報交換や相互連携を目的とする「海と船の博物館ネットワーク研修会」については、本事業全体の抜本的な見直しの途中であり、本研修会の位置付けを再度整理する必要があるため、開催を中止した。

5. 博物館の海洋教育実施状況の調査（新規実施）

本事業の目的を達成するためには『「海洋」への興味喚起』から『社会教育における「海洋教育」の推進』へと変更する必要があるため、本事業の抜本的な見直しが必要となったため、現状の全国博物館での海洋教育実施状況や、海洋教育実施のためのニーズを把握するために、全国の様々な館種・分野・立地の博物館1,000館を対象とした海洋教育実施状況のアンケート調査を行い、534館からの回答が得られた（回答率53.4%）。

<主な集計結果（抜粋）>

- ・約4割の博物館が「海洋教育」という言葉を認知している【知っている：42.4%】
- ・博物館での「海洋基本法」の認知度はあまり高くない【知らない：62.5%】
- ・約49%の博物館で「海洋教育活動」が実施されている【実施したことがある：49.3%】
- ・主に企画展や教育普及活動において「海洋教育活動」が実施されている
- ・学校教育やカリキュラムと関連した海洋教育活動は少ない【関連していない：58.1%】
- ・5割以上の博物館が、今後海洋教育を実施していきたい
- ・海洋教育をさらに充実させたり新たに実施するためには「予算」、「外部の協力」、「学芸員のスキルアップ」などが必要

6. 博物館関係有識者事業検討委員会の開催（新規実施）

本事業の抜本的な見直しに際し、海洋教育実施状況のアンケート調査結果を基に、新たな事業内容を構築することとなったため、全国博物館の有識者及び海洋教育に関する有識者による「海と船の博物館ネットワーク活動事業の抜本的な見直しに関する有識者懇談会」を開催し、各有識者から本事業の効果的な実施のための意見を集め、新規事業案の構築に役立てた。

懇談会内容の総括として、全体的に本事業の全体計画及び各プログラムの試案についてはアンケート結果とも合致し、有識者からも効果が見込まれる試案であるとの評価であったが、本事業の趣旨をはじめとする諸条件、特に「海洋教育」という言葉や概念、成果を含む具体例、対象をあらゆる分野とする点などを申請者に分かり易く伝えるための工夫が必要であり、各館申請時の事務局サポート体制の在り方や審査方法、またこれらを継続する覚悟などについても今後調整する必要があるとの結果であった。

以上